

## それぞれの人生 来し方行く末



滝川市医師会  
滝川中央病院

くろ かわ やす お  
黒 河 泰 夫

私は今70歳を過ぎて格別感慨はないが、古代インド風言えば「遊行期（何物にも捕われない人生の最終盤）」にあたる。まだ仕事をしているが、本当は「お迎え」に備えたほうが良いと思っている。自分の人生はいくら何でもわかっているつもりであるが、齢を重ねるにしたがい他人の人生が気になるようになり、目についた自叙伝などを見るようになった。もしかしたら他人の人生を覗いて、その人の人生まで生きてみようという魂胆かも。ただし政治家、芸能人、スポーツ選手、経済人は除外した。

これまで面白かったものの例を少しあげると、以下ようになる。

①「実録 土工・玉吉 タコ部屋半生記」これは古い本で札幌市中央図書館にあった。土工をやっていた人たちは記録を残してくれなかったので、これは唯一のものではないかと思う。精神科医は娑婆のほとんどあらゆる階層の人たちと出会い、その人たちの人生に付きあって苦勞するのだが、タコ部屋の人たちがどのような価値観を持っているかはこれを読むまで知らなかった。

②「果てしなき探求」これは「反証主義」で名高いカール・ポパーの知的自伝であり、難しくて読むのに骨がおれた。私は最近の思想家のなかでは最高の人物と考え、いたく尊敬しているが、ポパーは1950年代に科学論における反証主義の立場から、当時一世を風靡していたマルクス主義とフロイトの精神分析とをやっつけた唯一の思想家であったという。その後上記の2つの思想がどうなったかは、皆さまご存じの通り。ポパーは自分の反証主義の思想を決して譲らなかったで、勤めていたLSE（ロンドン大学のひとつ）では「全体主義的リベラル」と影で言われていたという。

③「懐旧録」これは明治時代の初期に日本にサンسكريット仏典を紹介した南条文雄の自叙伝である。1876年に真宗大谷派から俊秀の留学生としてサンسكريット語の仏典を学ぶためにロンドンに派遣され、まず英語の習得からはじめたという。その後オックスフォード大学のマックス・ミュラー教授に師事して勉強したが、南条は当時30歳になっていたで、ミュラー教授から「どうしてお前たちはこんなに記憶力が悪いんだ」と言われたという。帰国後は全国各地でそれまでの漢訳仏典とはひとあじ違う説教をして、南条博士として絶大な人気であった。ついでだが南条に同行した笠原研寿は、たまたま私

の郷里の家から直線距離で10キロメートルの町にある寺の出身の方であった。彼はカントの第一批判書（純粹理性批判のことか）について、ミュラー教授とよく話をしていたという俊才であったが、本当に惜しいことに結核に罹患したため学業の途上で日本に帰国して亡くなった。

④「幾山河－瀬島龍三回想録」これは大本營の作戦課で一番年少であった瀬島龍三の回想録であり、学者とは違う発想の人の回想で興味深かった。ただし戦争責任があるためか、すべてを語っているようには思えなかった。驚いたのは瀬島の生家が私の郷里の家から直線距離で5キロメートルしか離れていなかったことで、同じ市から瀬島のような大人物が出たことはたいへん誇りに思っている。

さて自分の来し方はわかっている。昭和30年ころの富山県の片田舎は本当に素朴で、庶民的な人たちの頭の中と生活様式とは江戸時代や明治時代とほとんど変わっていなかった。田舎の老人方は折に触れて寺に集まり、お坊さんはよく極楽の話をしていて、「極楽には苦しいことはひとつもない」と強調していた。子どもたちは悪ガキみたいなのでどこにでも入り込み、私も寺の縁側に入り込んで遊んでいて、お坊さんがどうしていつも極楽の話ばかりするのか理由がわからなかった。なにしろ当時私の1年はものすごく長く、人生は無限に続くものと思っていたものだから。

行く末については、いくら考えてもわからない。私の父母は既に死に、お世話になって足を向けて寝られない同門の諸先輩方もあらかた天に召されてしまった。その後のあの世の生活については誰も教えてくれないし、物理学や生物学を極めたとしても、あるいはどんな本を読んだとしてもやっぱりわからないだろう。行く末については、もしかしたら同年輩の誰もが考えていることかもしれない。とにかくこの世の人生の総決算をして、安らかに未知の世界に入るのを待つことが遊行期の課題であろう。